

学問中心地としての アメリカ大学院とその形成条件

()
奥川 義尚

20世紀前半から、世界の学問中心地として位置づけられている、アメリカ大学院について、その学問中心地の形成条件を考察してみると、第一に19世紀に研究中心の大学観を受け入れていたアメリカでは、学部段階の教育をリベラル・アーツ教育とし、卒業後の専門教育の場として大学院が早くから整備され、このようにして学問的生産性が高い歴史や伝統のある大学、いわゆる伝統校が設立された。第二にアメリカの大学院教育は大規模であり、また高等教育機関が機能的に類型化され、多種・多様な高等教育機関が存在し、博士課程での教育・研究は主に研究大学と大学院大学、および専門大学で行われているなど、アメリカでの研究が巨大な高等教育システムにおける研究重視の大学院のなかに位置づけられている。第三に学問的生産性を高めるには、研究生産性と教育生産性の両面を常に高める必要があり、そのためには常日頃からの他者との比較、すなわち他者評価が不可欠と考えられるが、アメリカの大学評価は早くも19世紀から試みられ、さまざまな組織や団体によって、それぞれの観点から質的分類や評価が行われるようになった。このような多種・多様の大学教授職主導の評価システムがアメリカ大学院の学問的生産性を高めたと考えられる。第四にアメリカの大学院は研究活動の成果を大きく左右する研究費が、特定の大学に集中的に多額が配分されていて、そのことが大学院における研究の質を高めている。さらに大学における学術教育・研究とアメリカの産業界や政府研究機関との幅広い人事交流を含めた密接な連携や協力関係、すなわち産学協同による効果的な研究のありかたが学問的生産性を高めた。第五に大学がアメリカの文化や社会にみあうように歴史的に形成・発展してきた。その特徴の一つとしてアメリカの大学は、ヨーロッパや日本の伝統的な講座制とは違い、昔

から教育と研究の両面を重視した学科制が主流であるなど、大学の効率的な組織運営のありかたがある。

さらにアメリカ大学院の最上位は、教育・研究活動のためのさまざまな制度的条件をみだしていることである。ここでは「待遇条件」「入試難易度」「施設設備」などの一般的特徴をみでみる。教員の待遇条件の影響を知るために、大学教員の「給与水準」と学問的生産性をみでみると上位校の内、ほとんどの大学の教員の給与水準は全米の大学でもかなり高い。日本と較べればアメリカの大学教員の大学間移動率は高く、また優秀な研究者に対する大学間のスカウト合戦も激しいので、条件のよい大学には有能な大学教員が集中するといわれているが、このことは「給与水準」の高い大学には有能な教授陣が集まり学問的生産性も高くなることを示している。次に「入試難易度」をみでみると、アメリカの大学では、実際の入学者選考で、「学力」以外の条件を基準にしている大学が少なくないので、この指標は必ずしも各大学の学部段階の「質」を正確にとらえていないが、学部入学の難しい大学ほど、その学問的生産性は高い。したがって「学力」の高い高校卒業者を学部で受け入れている大規模大学は、大学院の学問的生産性も高いということがいえる。また一般的に研究や教育のための「施設設備」が充実しているほど、大学院の学問的生産性が高いと考えられているが、ここでは1992 - 93年度に目録化された書籍総数を指標として採用して考察してみる。この書籍総数を大学図書館の総合的な充実度とみなせば、全米の大学のなかでは、ハーバード大学が第1位で1千260万5537冊であり、いずれの上位校も書籍総数は全米の大学のなかでもトップである。「図書館の規模(書籍総数)」と学問的生産性の相関については、書籍総数が最も多い大学群の研究能力からみた「教授陣の質」の標準得点が最も高い。このことから図書館の充実している大学ほど学問的生産性が高いことがわかるが、大学図書館が充実していることは学問中心地の形成条件として必要不可欠な要因といえる。

おくがわ よしひさ(教授・高等教育論)